

がん患者・家族の支援 私たちにできることは？

患者会、医療従事者、支援者らが意見交換

JCSD2022開催

日本対がん協会

がん患者や家族らを支援する「JAPAN CANCER SURVIVORS DAY(ジャパン・キャンサー・サバイバーズ・デイ)2022」が6月5日、東京都内の会場とオンライン配信のハイブリッドで開催された。新型コロナウイルス感染症の状況を見つつ、3年ぶりの会場開催となった。日本対がん協会の活動の柱の一つである患者・家族の支援を担う、がんサバイバー・クラブ(GSC)、リレー・フォー・ライフ(RFL)が共催し、がん相談ホットラインが協力。がん専門医の講演、患者会活動をテーマにしたパネルディスカッションがあった。

今回のテーマは「私たちができるがんサバイバー支援ってなに?」。患者会の活動を中心に、患者や家族に何が提供できるか、どのように寄り添っていくのか、患者会に求められているものなどについて考えた。

前半の講演では、がん研有明病院腫瘍精神科部長の清水研医師が「コロナ禍だからこそ必要な寄り添い」と題し、コロナ禍の中で不安を感じている患者への寄り添い方について語った。事例



コロナ禍で会場開催は3年ぶり。患者会などが活動紹介のブースを出展した

を交えながら、患者に寄り添っていくには、まずは相手のことを理解するために質問もしながら丁寧に話を聞くことが大切だと説明した。また、宮崎善仁会病院消化器内科・腫瘍内科の押川勝太郎医師が「医療者が求める患者会・支援団体とは?～連携しよう!～」との題で、医師、看護師の手が届かない日常生活の中で、患者会や支援団体が患者・家族をサポートすることで、より良いがん治療の環境が整うと呼びかけた。

後半は、がんサバイバーや家族を対

象にしたアンケート調査の結果をもとに、患者支援のあり方などについて清水医師、NPO法人GISTERSの西館澄人さん、日本対がん協会相談支援室の北見知美マネージャーによるパネルディスカッションがおこなわれた。

会場となった朝日新聞東京本社読者ホール(東京都中央区)では、GSCやRFLの活動に参加している患者会、支援団体がブースを出展。講演とパネルディスカッションの合間に、各団体の代表者がそれぞれの活動内容を紹介した。

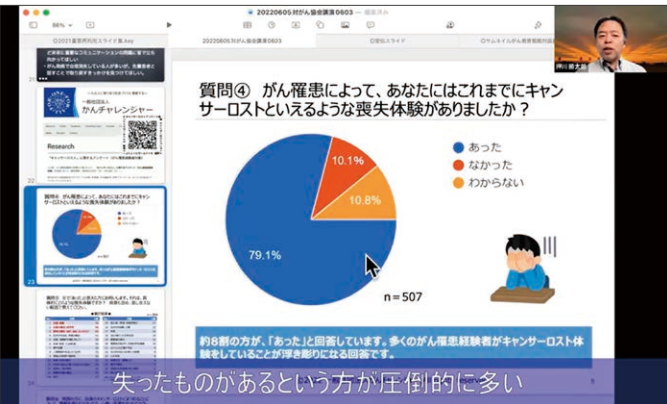
寄り添っているということ

- ①その人の悩みを理解しようとする
その人の悩みを理解するための質問を繰り返すこと。
〇〇で悩まれているのですねと伝えること。
- ②心から「〇〇という気持ちなのですね」と言える
- ③相手が「自分の気持ちをわかってもらえた」と思える

簡単ではない。結果ではなく、理解しようとする姿勢が大切

ただこれはまあそういう風に行くこともある

清水研医師の講演資料より



失ったものがあるという方が圧倒的に多い

押川勝太郎医師の講演資料より